

# いのちといのちの響き合いとしての「実心実学」

## —そのための三つの提案—

片岡龍（東北大）

日中韓の実学研究会（学会）の共同作業によって三国同時刊行された実学思想家 99 名（日中韓各 33 名）を紹介する書（日本語版は『日中韓思想家ハンドブック 実心実学を築いた 99 人』勉誠出版、2015）の中に、東北地方出身の思想家が 4 名います。年代順に、安藤昌益（1703～62）、乳井貢（1712～92）、高野長英（1804～50）、新井奥邃（1846～1923）の 4 人です<sup>1</sup>。

このうち最も有名なのは、「蛮社の獄」（1839）で捕らえられながら脱獄、硝酸で顔を焼いて人相を変え逃亡生活を続けたものの、ついに自殺に至った高野長英だと思います。高野長英に関しては、12 月 23 日（月）のエクスカージョンで記念館を訪問予定です。また乳井貢については、本フォーラムにもご参加の小島康敬教授の研究があり、また午後の若手論壇では楊世帆さんによる報告もあります。したがって、ここでは安藤昌益と新井奥邃の二人に絞って話します。

安藤昌益は比較的有名かもしれませんが、しかし、昌益が一般に知られるようになったのは、今から 70 年前に出版された、カナダの外交官で歴史家のハーバート・ノーマン（1909－57）の『忘れられた思想家 —安藤昌益のこと—』（岩波新書全 2 巻、1950）によってです。この書の題目がよく示しているように、安藤昌益は彼が生きていた徳川時代から、すでに「忘れられた」存在でした。徳川期のどの思想家の著作中にも昌益の名は見えません。このような同時代の思想界に全く影響力をもたなかった思想家を、思想史として研究する意義はないと極論する人もいます。

さらに新井奥邃となると、仙台出身にも関わらず仙台市民にさえ、また日本思想の専門家にすら、ほとんど知られていない超無名の思想家です。しかし、ノーマンと同じく宣教師の家庭に育ち、小学校を岩手県盛岡で過ごされ、現在は福岡女学院大学で教えられているダニエル・コールさんの尽力で、10 巻に及ぶ『新井奥邃著作集』（春風社、2002～06）が近年に刊行されました。数は少ないものの熱烈な愛好家が、狭いアカデミズムの枠を越

えた在野に存在しています。これは、昌益の場合も同様です。

彼らが「忘れられ」ているということは、何を意味しているのでしょうか？

わたしは、「実心実学」の萌芽は、日本では安藤昌益や乳井貢の時代、すなわち 18 世紀頃にあったと考えていますが、また地理的には、文明（東アジア・日本）の「周縁」に萌芽しやすかったと見ています<sup>2</sup>。そして、この「実心実学」は、つねに「実用実学」との対抗関係において存在してきた、もっと言えば、「実用実学」によって存在を否定されてきたと考えます。高野長英の数奇な運命は、そのことを象徴しているかのようです。

なお、この場合の「実用実学」とは、現在の科学技術自体と同義ではなく（長英は医学者・蘭学者であり、ある意味で現在の科学者・技術者）、「中心」（権力、金力、武力）の用に役立つ知力・学力、いわゆる「御用学問」の総称です。また、この「中心」を、今回のフォーラムの総合主題と関連させて、「近代」と言ってもよいと思います。

ただ注意しなければならないのは、このような「実用実学」／「実心実学」、「中心」／「周縁」、「近代」／「反（・前・後・脱・・・）近代」といった二項対立的な捉え方は、仮に後者の立場に立つにせよ、やはり「近代」（前者）の枠組みに捕らわれている点です。

「近代」をどう定義するか、様々な見方があるでしょうが、「中世」からの断絶・否定の上に成立した「近代」は、自己と他者を断絶し、かつ自己の「中心」化・他者の「周縁」化に余念がないところに本領があると、わたしは考えます。一言でいえば、差別意識です。

この差別意識は、二項対立の前者の側だけにあるわけではありません。人生の中で勝利を求める多くの人の心の中に潜んでいるものです。したがって、後者も容易に「中心」化します。ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥング（Johan Galtung、1930-）は、中心（C=center）／周縁（P=periphery）それぞれの中に、さらに利害の対立する中心（c）／周縁（p）があり、中心部どうし（Cc と Pc）の利害は一致するが、周縁部どうし（Cp と Pp）の利害は一致しないため、この構造からの脱却は容易でないと考えました<sup>3</sup>。

そこから脱却する第一歩は、自分自身と身の回りにある差別意識の徹底的な自覚にあると考えます。ヘイトスピーチや優生思想などのわかりやすい差別意識はもたなくても、大学ランキングや学術誌のインパクトファクターを気にするのは、やはり同根の差別意識によるのではないのでしょうか？学問にたずさわる者なら誰も、自分の学問を「御用学問」などとは考えません。しかし、テニユアを得るために論文を書くことは、自分という「中心」の用に役立てるという点で、ある種の「御用学問」と言えば、言い過ぎでしょうか？

安藤昌益や新井奥邃が「忘れられた」のは、たんに「中心」の抑圧のためだけでなく、

むしろ彼ら自身が、自分と周囲に存在する差別意識を徹底的に自覚したためと考えます。他者の差別意識を批判するのは容易です。昌益も天／地、男／女といった上下二分的差別意識を「二別」と呼び、その由来を文字発明の時点にまで遡って、根源的に批判しました。しかし、その批判も同様に差別意識の根である文字によってなされる以上、結局は「二別」のイデオロギーの再生産にしかならない。そのことを昌益は自覚し、みずからの著作活動を、後世に託すためのやむを得ない手段とみなしました。

3 万年来、文字の迷妄を明らかに表した者はなく、天下広しといえどもこれを知った者はなかった。[……] そこで「転真」の精妙な道が廃れてしまった。わたしは、それを悲しみ、「転真」の精妙な道は、天・地・人がともに一和するということを明らかにすることが出来たので、これを後世に伝えようと著述したのである。<sup>4</sup>

古人が作った文字は、道を誤っているのです、その誤りを糺すには、まさにその誤りの字を借りて、道を表す。文字をたつとぶのではない。誤りの文字によって誤りを廃棄して、「活真」の精妙な道、「互性」があまねく備わった道を表すのである。<sup>5</sup>

「転真」の「転」とは、昌益が「天地」という文字の「二別」性を批判して、「転定」と改めたことによります。「転」は循環する大気、「定」は還流する大海と安定した地殻。つまり、「転定」は大気圏・水圏・岩石圏からなる地球です。そして、この「転定」の間を一種の生命エネルギー（「活真」、「転真」）が循環しているので、すべての存在は「二別」ではなく、「互性」の関係にある。この「性」を昌益は「たましい、いのち」<sup>6</sup>と読ませていることから、「互性」とは「魂と魂の絡み合い」、「命と命のつながり」などと言ってよいと思います。

そこで、本報告における**第一の提案**は、「**実心実学**」の「**実心**」を、「**魂**」・「**命**」の意と見よう、というものです。東アジアの思想伝統においては、「心」という概念は、画一性を前提とします。たとえば、朱子学では「心」を「性」・「情」に分けますが、「情」は「性」の同一性を妨げやすいものと位置づけられています。「実心」の「実」は、むしろ「心」の「情」的側面を強調する点があるので、一人一人、一物一物の個性・かけがえのなさという意味合いの強い「魂」・「命」と言い換えられると思います。

新井奥邃も、次のように述べています。

自と他は一つではない。それこそが一である理由である。自己を知れば他者を知り、他者を知れば自己を知る。[……] 永遠の生命は二でありつつ一である複数の性である。

[...] 手足を断てば、身体は立たない。心と腹が分裂すれば生命は亡ぶ。わたしの力は、人と共に生きる力である。人の力は、わたしと共に生きる力である。二でありながら一、一でありながら二である。(互いを) 受け入れて真実に抱き合うところに核心がある。<sup>7</sup>

これは、まさに昌益の「互性」と同じ発想です。そして、次のようにも述べます。

そもそも徳業は謙に因る。ゆえに、道を行おうとすれば常に下降せよ。下降し下降して、ますます下りさらに降る。これがなかなかできないところだ。思うにこれは本当に真実の道なのだが、つねに偽りの道を打ち破って進まなければならないからである。これはつねに誘惑に伴われる。誘惑がわたしの上に立ってわたしの嗜好に働きかけ、わたしに謙道を嫌わせる。謙道はつねに社会から卑しめられる。それによって誘惑者はわたしを社会の中で高上させようとする。しかし、生命が発育し繁り栄える種は必ず謙なる地に播かねばならない。地下に入って芽を出すまでは、忍耐が必要だ。その忍耐の間においてつねに神の同情を受けるのである。<sup>8</sup>

差別意識の根源は、社会的な上昇志向にある。自己と他者を断絶、あるいは同化しないためには、謙道を無意味と迷わせるような誘惑を打ち破って、ひたすら下降しなければならぬ。言い換えれば、この世から「忘れられ」なければならないと言っているのです。その言葉どおり、新井奥邃は著作を公にせず、さらには一枚の写真も残さず、墓すらも作らせませんでした。

社会に対する昌益や奥邃のこのような下降的姿勢を、「近代の暴走」に直面しているわたしたちは、いったいどのように受けとめるべきでしょうか？

上述したように、「近代」を自己と他者を断絶した上で、自己の「中心」化・他者の「周縁」化を図ることと見るなら、「近代の暴走」とは、その「中心」化・「周縁」化の行きつく先、すべてが「中心」化され、あるいはすべてが「周縁」化されるようになったとも言えます。自分の意図とは別に、突然自分がハラスメントの加害者とされたり、被害者になったりするような、一種の不条理的世界です。

突然、自分が加害者となり被害者となるような状況とは、実は戦時下と同じ状況です。現代を「大中世」とも言うべき激動と混迷の乱世の時代と考える人もいますが<sup>9</sup>、わたしはもっと踏み込んで、国と国や民族と民族等の次元だけではない、個々の生命次元の「大戦国時代」がすでに始まって久しいと考えます。

昌益は、次のように述べています。

戦争が起こり、軍隊がかり出されて、多くの人が殺し殺され、だれもが安心して暮らせず、憂い悲しみによって汚された人間の気が、自然の「活真」の気を汚し、そのため不正な気のめぐりとなって、凶年となって五穀は実らず、餓死者と伝染による死者が数え切れないほどになった。[···]その根本的な原因は、聖人と釈迦が、自分勝手な法を立て、「不耕貪食」し、自分がまず他人のものを騙し取ろうとする心に迷わされることで、それが後に世の人を迷わせ、暴力欲を引き起こすところにある。<sup>10</sup>

ここに言う「戦争」は、直接的には昌益より 100 年以上前の戦国時代のことを指していますが、その「不正の気」による被害を、昌益は「泰平の世」である現在のものと見、さらにその根本的な原因を孔子や釈迦の時代にまで遡らせています。これは、昌益が戦争と平和を、人間だけでなく、個々の生命次元で捉えるからです。

伏羲が人間世界の平和（「人和」）だけを考えたことから始まり、孟子がそれを継承した時から、その後 1,000 万年のはるか未来まで、争乱が途絶えることがないのは、人間世界の平和によって、天と地の本当の平和を盗んだからである。<sup>11</sup>

新井奥邃もまた「天地（自然）の気象」の次元から、現在を久しい戦争状態の極みにあると捉えていました。

ああ、今やこの世界には殺伐・強奪・種々の暴乱が極まり、人の良貴な性質が失われて久しい。このような時に際して、自然の気象も聖なる清らかさを保つことはできない。もしも人が改新しなければ、今後自然はいっそう荒ぶり、深刻な災害に襲われよう。人間がその欲望を自分や周囲の中で充たしたとしても、自然の勢いによって国や世界が亡んでしまうなら、なんの意味があろうか。世界・国家の民たる者は、安泰を得るために、共に淡然たる寡欲に進み、この過ちを補わなければならない。これは隠退的・消極的な悲観ではなく、積極的な篤信である。今や文明と称しながら、国は国を攻撃し、家は家を破壊し、人々が互いに損傷しあうことがあまりに多い。太古に道を誤って人間が野蛮化して以来、無秩序な殺戮が次々に起こり、ここまで至った。開化はまだ人心に及ばず、（世界の）永続は保証しがたい。（真の文明に）似て非なる物質的進歩は近来迅速だが、非文明の人心が現象界に充満している。それでも世人はそれを安泰と見るのか、いささかなりとも反省しなければならないのではないのか。<sup>12</sup>

このような戦争状態を終わらせるには、人々が「共に淡然たる寡欲に進む」以外ないと言っていますが、奥邃はそれを「隠退的・消極的な悲観」ではなく、「積極的な篤信」と称しています。先に見た「謙の道」についても、「謙は善く戦ふ。夫れ謙は驕奢自肆と正に相

反すと同時に、決して隠棲柔弱なる者に非ず。謙は善く戦ふ、是れ神戦也」<sup>13</sup>と書いています。

昌益や奥邃の下降は、けっして社会に対する消極的悲観ではなく、個々の生命次元の戦争を「天と地の本当の平和」へと転換しようとする積極的希望だったと、わたしは考えます。そして、あらゆるものが「中心」化したり、「周縁」化したりする「近代の暴走」に直面している今こそ、彼らの方法の真価が発揮されるべきと考えます。

そこで、最後に駆け足になりますが、本報告における**第二の提案**は、「**実心**」(＝命、魂)を**単数形ではなく複数形で捉えよう**、というものです。昌益や奥邃の下降は、社会から離脱して「独り善くす」る(『孟子』)ためのものではなく、個々の生命どうしの連帯(「互性」、「複性(二而一、一而二)」)を望むものでした。それを本報告では、「いのちといのちの響き合い」と呼びたいと思います。

しかし、生命どうしの連帯、いのちといのちの響き合い等と言っても、実際には個々の生命どうしの関係は、それぞれ少しでもみずからの生命を長引かせたいとの思いにより、食うか食われるかの相剋関係になることがほとんどです。わたしたちの差別意識の由来するところであり、「大戦国時代」の久しいゆえんです。

そのためには、いのちといのちを響き合わせる技術(Art)を学問化し、多くの人が共有できるものにしなければなりません。しかし、一つ一つのいのちはかけがえない個性をもっているため、その響き合わせの方法も多種多様なはずで、それを学問化することは、たいへん難しいことです。しかし、決して不可能ではないと思います。

最近、わたしは「マカーム」というアラブの音階に関する話を聞きました<sup>14</sup>。常味裕司さんというウード演奏家によると、人生の複雑多様な感情を繊細に表現できる「マカーム」は、それを実際に合わせて完璧に理論化しようとする、精巧すぎて非現実的なものとなり、逆に理論化を優先すれば、実際の多様性が画一化されやすくなると言います。しかし、その絶妙なバランスを、イスラーム音楽哲学は追求したようです。これを「実心実学」に関わらせれば、人間の「心」の複雑多様な「実」際(「実心」)を、その多様な豊かさを損なわずに学問化することが、「実学」と言えます。

本報告における**第三の提案**は、今後の「実心実学」研究は、日・中・韓の交流をいっそう深め、さらには**視野を中東やアフリカなどまで含む地球全体に拡げて、いのちといのちの響き合いの多様性を損なわない「実学」化を共通目標**としよう、というものです。なぜなら、日・中・韓(東アジア)もそれぞれ一つのいのちに過ぎず、視野をそこに限定するこ

とも一種の「中心」化（→戦争）に外ならないからです。地球、ひいては宇宙全体のすべてのいのちを「周縁」と捉え、その響き合い（networking）による宇宙の多様な創発（→平和）を柔軟に学問化（・世代継承）すること、これを「実心実学」と呼びたいと思います。

## 注

- 1 安藤昌益は現在の秋田県大館市、乳井貢は青森県弘前市、高野長英は岩手県水沢市、新井奥邃は宮城県仙台市出身。このほか東京都中央区築地（仙台藩江戸上屋敷の近く）出身で、後に仙台に移住した只野真葛（1763～1825）を含めると、5人。
- 2 たとえば、昌益とほぼ同時代の沖縄には、蔡温という実学思想家がいる。蔡温については、拙稿「前近代東アジアにおける「心学」と「実学」の関係—琉球の蔡温（1681～1761）を中心に—」『第十四届東亜実学国際高峰论坛论文集（一）』（中国実学研究会、2017）参照。
- 3 高柳先男『戦争を知るための平和学入門』（筑摩書房、2000）109～113頁
- 4 「三万年来是レヲ明カシ見ハス者無シ。転下広シト雖モ是レヲ知ル者無シ。[···] 故ニ転真ノ妙道廢ル。予、之レヲ悲シミ、転真ノ妙道ハ俱ニ一和スルヲ明カシ得テ、是レヲ後世ノ為ニ修ス」（『安藤昌益全集 第十四卷』農山漁村文化協会、1985）84頁
- 5 「古人ノ作ル文字ハ道ヲ失ル故ニ、其ノ失リヲ糺スニ乃イ失リノ字ヲ仮リテ道ヲ見ス。字ヲ貴ブニ非ズ、失リノ字ヲ以テ失リヲ棄テテ、活真妙・互性具尽ノ道ヲ見ス」（『安藤昌益全集 第一卷』農山漁村文化協会、1982）179頁
- 6 「心ヲ生ス、生ス心、故ニタマシヒ・イノチ」（『安藤昌益全集 第2卷』農山漁村文化協会、1984）304頁
- 7 「自他は一に非ず。是れ其一たる所以也。己を知れば他を知り、他を知れば己を知る。[···] 永遠の生命は二而一にして複性也。[···] 手足を断たば身体立たず。心腹分裂すれば生命亡ぶ。我の力は、人と共に生きるの力也。人の力は、我と共に生きる力也。二而一にして一而二也。受けて真に相抱くに在り」（『新井奥邃著作集 第七卷』春風社、2002）42～43頁
- 8 「夫れ徳業は謙に因る。故に道を行はんと欲せば常に下降せよ。下降々々、益々下りて又降る。是れ能くし難き所。蓋し是れ誠に真道にして、常に偽道を打破して進まざるべからざればなり。是れ常に誘惑の伴ふ所となる。誘惑我が上に立ちて我が嗜好に投じ、我をして謙道を悪ましむ。謙道は常に此の世に賤まる。誘惑是を以て我をして世に高からしめんと試む。然れども生発繁栄の種子は必ず謙地に播かざるべからず。地下に入りて化するまでは、忍耐を要するなり。其忍耐の間に於て常に神の同情を受く」（『新井奥邃著作集 第三卷』春風社、2000）438頁
- 9 鎌田東二『世直しの思想』（春秋社、2016）
- 10 「大乱・大軍シテ人多ク殺シ殺サレ、万人手足ヲ安ク所無ク、患ヒ悲シム其ノ邪汚ノ人氣、転定・活真ノ氣ヲ汚シ、故ニ不正ノ氣行ト成リテ、必ズ凶年シテ実ラズ、多ク餓死シ、疫癘シテ病死ス。[···] 是レ其ノ本、聖・釈、私法ヲ立テ、不耕貪食シ、己レ先ヅ盜欲心ニ迷フテ、而シテ後ニ世人ヲ迷ハシ、欲賊心ト為サシメテ致ス所ナリ。」（『安藤昌益全集 第一卷』農山漁村文化協会、1982）119～120頁
- 11 「伏羲ノ人和ヨリ始マリテ、孟子ガ時、猶後後千万年ニ至ルマデ、乱シテ絶ユルコト無

キハ、人和ヲ以テ天ノ時、地ノ利ノ本和ヲ盗ム故ナリ」(『安藤昌益全集 第四卷』農山漁村文化協会、1983) 127 頁

<sup>12</sup> 「ああ今や此の世殺伐強奪多方暴乱極まる、人の良貴其性を失へるや久し、此の時に当り天地の氣象何ぞ独り其聖清を保せんや、人若し改新せずんば今後天氣益々激し、災に罹る更に深からん、人或は其慾を自家私党の内に充たすと雖も、若し天勢の下に国天下の亡ぶるに至らば、則ち何の益あらん、豈天下国家の民たる者相共に淡然寡慾に進んで其過を補ふの安泰を得るに如かんや、是れ隱退消極の悲觀ならず、積極的な篤信なり、今や文明と称すれど、国は国を伐ち家は家を毀ち、人々相戕賊するの多に非ずや、太古道を誤りて人間蛮化せしより以来、乱倫殺伐相継ぎて茲に至る、開化未だ人心に及ばず、豈永久を保せんや、似て非なる物質進歩の近来迅速なるも、非文明なる人心の又従つて形蹟の外に充溢す、世人猶以て安しとするか、聊か自ら省みよ」(『新井奥邃著作集 第五卷』春風社、2001) 441～442 頁

<sup>13</sup> 『新井奥邃著作集 第二卷』(春風社、2000) 386 頁。

<sup>14</sup> 信州イスラーム世界勉強会 2019 年度 12 月定例会「東西音の十字路 常味裕司ウード演奏会」、松本市中央公民館 M ウィング、2019.12.7。以下の動画も参照。「常味裕司アラブ音楽講座～アラブのミはどうして低い?～第二回」

<https://www.youtube.com/watch?v=Kf5ksSAaL-Y>